



第4回 生物多様性 日本アワード

授賞式 プログラム

2015年10月20日(火) 14:00~16:45
国際連合大学 ウ・タント国際会議場

▲ 今後の植樹予定 ▲

イオン環境財団では、植樹活動を通して生物多様性の宝庫である森を育んできました。
皆さまも、ご家族、ご友人と、植樹活動にぜひご参加ください。

■緑化の推進と自然災害を軽減させる緑の防波堤を築こう

「うらやす絆の森」植樹 (千葉県浦安市)
11月14日(土) 10:00~12:00

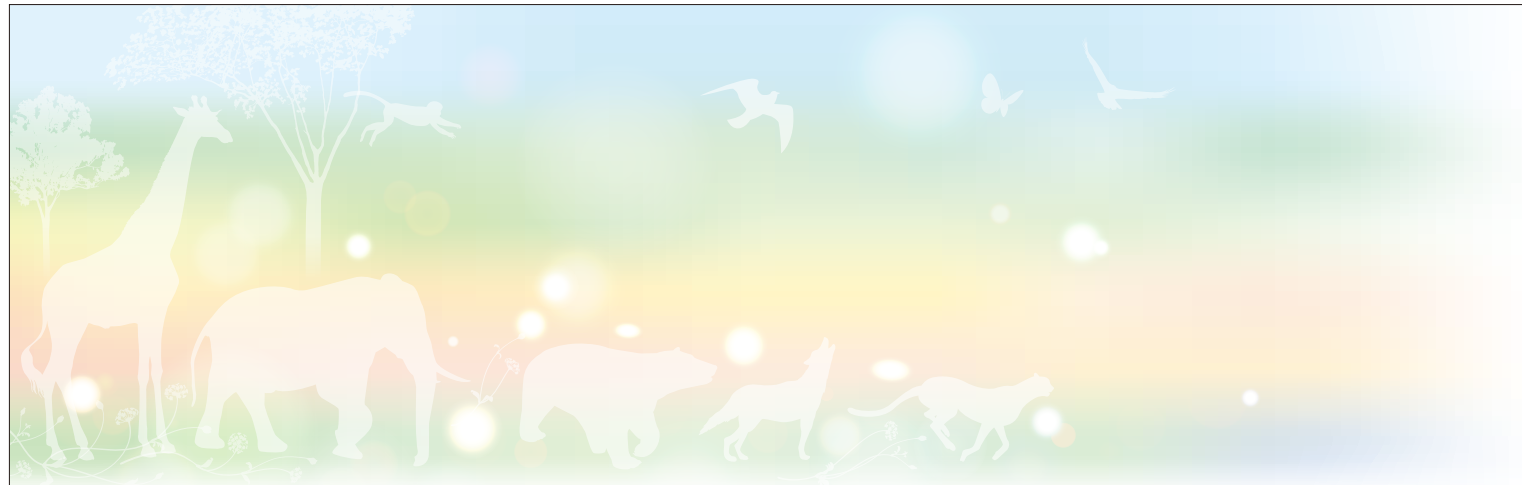
■ユネスコエコパークに登録された照葉樹林のまち「綾町」で自然と共生するまちづくりを

綾町植樹 (宮崎県綾町)
11月21日(土) 10:00~12:00

詳細は、下記ホームページをご覧ください。

イオン環境財団ホームページ

<http://www.aeon.info/ef/activity/kokunai/index.html>



ごあいさつ

公益財団法人イオン環境財団は、平和の追求、人間尊重、地域社会への貢献という基本理念に基づき、1990年に設立されました。21世紀が水と緑の世紀になることを願い設立された当財団は、多くの皆様に支えられ、本年25周年を迎えました。

私たち人間の営みは、これまで環境に様々な影響を及ぼしてきました。環境問題は、私たちの日々の暮らしや、そして未来の子どもたちのために、早急に対処しなければならない課題となっています。

それらの課題に対処するため、当財団は、生物多様性の保全と持続可能な利用の推進を目的とした国内賞「生物多様性日本アワード」を2009年に創設いたしました。本アワードは、2010年に当財団が創設した国際賞「The MIDORI Prize for Biodiversity (生物多様性みどり賞)」と交互に隔年で開催されています。

2010年COP10において採択された「愛知ターゲット」や、2011年にスタートした「国連生物多様性の10年」を推進するため、当財団は本アワードを継続的に実施してまいります。

私たちの緑の地球を次代に引き継ぐため、当財団はこれからも環境保全、環境教育の推進などに取り組んでまいります。

公益財団法人イオン環境財団
理事長 岡田 卓也

プログラム

13:30 受付開始

14:00-14:45 授賞式

- ◆主催者挨拶：岡田 卓也（公益財団法人イオン環境財団 理事長）
- ◆優秀賞表彰
- ◆グランプリ表彰
- ◆審査講評：赤池 学（ユニバーサルデザイン総合研究所 所長）
- ◆祝 辞：奥主 喜美（環境省 自然環境局長）

14:45-15:00 休憩

15:00-16:00 受賞者プレゼンテーション

16:00-16:45 記念講演

「生物多様性に学ぶものづくり インセクトテクノロジー」
長島 孝行（東京農業大学農学部 教授）

進化のプロセスで研ぎ澄まされた生き物の不思議な力。その機能・構造を解明し生物多様性の持続可能な利用に活かす技術を紹介する。

閉会





プロジェクト名 「お茶で琵琶湖を美しく・お茶で日本を美しく」プロジェクトを通じた生物多様性保全の取り組み

団体名 株式会社 伊藤園 (東京都)

活動概要

「お茶で琵琶湖を守りたい」という思いから「琵琶湖環境保全活動」を毎年継続実施。地元ニーズと自然保全の専門性とを学習することで社員の能力向上を図りながら、持続可能な活動となる仕組みを作り上げた。この経験を活かし水環境を守る「お茶で日本を美しく。」活動を全国へと拡大。201の支店を「活動支援拠点(プラットフォーム)」として位置づけ、消費者・行政・NPO・コミュニティと連携しながら、寄付と社員・ボランティアによる実地活動を一体化。生物多様性の保全、「地域づくり」「人づくり」につながるCSR活動を目指し、活動を続けている。

活動年数 「お茶で琵琶湖を美しく」プロジェクト 7年 (2008年/平成20年~現在)
「お茶で日本を美しく」プロジェクト 5年 (2010年/平成22年~現在)

活動実施場所 滋賀県および26都道府県

More about the Project

伊藤園では、活動を円滑に進めるため、例えば、バスの手配・傷害保険の手当て、カマや長靴準備など「後方支援を万全にすること」に配慮している。また、成果を継続累積するため、成果記録を「見える化(マニュアル化)」し、支店内での引継ぎを確実にを行い、人事異動に関わらず活動が継続して行われる仕組みを構築してきた。さらに現場においては、常に社員家族の参加を募り、ともに活動し学ぶことを奨励するとともに、一般の方たちとの話し合いの場を設け、自然保護や公共の意識についての啓発を図り、誰にとっても持続可能な活動となるように努力している。また、社内表彰制度としてCSR大賞を設け、社員のモチベーションの高揚に努めている。



ホームページ <http://www.itoen.co.jp/itoen-motherlake/>
<http://www.itoen.co.jp/eng/csr/index.html>

<http://www.itoen.co.jp/kirei/>

プロジェクト名 エゾシカの先進的な資源的活用促進事業

団体名 一般社団法人 エゾシカ協会 (北海道)

活動概要

シカ問題が激化した北海道においてエゾシカの適正な個体数管理が強く求められる中、シカ肉を適正に利用し、森林保全に還元する仕組みを作ることは急務であった。しかし、食肉利用の際に最も重要な衛生管理体制が未整備であったため、エゾシカ協会は平成19年に厳しい衛生基準をクリアしている解体処理場の製品の認証制度を創設した。さらに平成24年からは認証処理場で処理された肉の加工食品の認証制度をスタート。平成27年からは肉の検査者となるシカ捕獲者の認証制度創設にも取り組んでいる。本プロジェクトは、安心安全なシカ肉の流通により、森とエゾシカと人との適正な関係を築き、シカ肉の資源的価値の向上に貢献するものである。

活動年数 16年 (1999年/平成11年~現在)

活動実施場所 北海道

More about the Project

エゾシカ協会は設立時から、輸入穀物と化石エネルギー非依存でフードマイレージゼロのシカを「資源」として活用する管理方法を模索してきた。客観的な衛生管理体制の提案に加え、多様な普及啓発活動を展開。北海道における「シカの日(毎月第4(土)火(祝)曜日)」を活用したPR活動、小学校や高校向けの出前授業やシカ肉(しゃぶしゃぶ)試食、講演、国際シンポジウム等を実施し、社会へのシカ肉のアピールを行っている。同協会の認証制度をモデルとして、兵庫県や長野県でも同様のシカ肉認証がスタートするなど、同協会の影響力も拡大している。



ホームページ <http://yezodeer.com/index.html>



プロジェクト名 水辺環境の保全・再生の実践と地域活性化

団体名 九州の川の応援団／九州大学島谷研究室 (福岡県)

活動概要

九州の川の応援団は、生物多様性に関する徹底した科学研究により、生物多様性に寄与する技術的な提案を作成、実施してきた。また、その成果を市民に対しビジュアル化して示すことで、生物多様性の素晴らしさ、豊かさの共有に努めている。川づくり事業計画への参加と主体的取り組み、小さな自然再生、市民の駆け込み寺、合意形成、自然再生を地域活性化へつなげるための仕組みづくり、環境教育等を、様々な主体と協働して実践し、河川環境における生物多様性保全・再生の取り組みを楽しく展開することで、地域の活性化に大きく貢献してきた。

活動年数 12年 (2003年／平成15年～現在)

活動実施場所 九州全域、東京都、宮城県、新潟県、山口県、島根県、インドネシア、マレーシア、中華人民共和国

More about the Project

九州の川の応援団は、川の環境を良くしたいと思っている全ての人・生き物を応援するための団体である。河川等の水辺の生き物の生息場の保全再生を行い、併せてその活動の関係者を元気づけ、地域づくりへ発展させる活動を行っている。これらの活動には学生も含め研究室全体で取り組んでおり、生物多様性に将来関与する人材育成にも寄与している。またその活動は、他府県のみならず、国境を越え海外にまで及んでいる。地元福岡においては、老若男女が一堂に会し、いい川について発表しあう“ふくおか水守自慢!”等のイベントを10年以上にわたり毎年開催。川のあるまちで、楽しみながらいい川をつくるための活動を実践している。



ホームページ <https://www.facebook.com/shimataniken>
<http://16hayashi.wix.com/ryuikisystem>

プロジェクト名 市民力を結集してドブ川を多様な生き物がすむ「ふるさとの川」に再生・復活

団体名 NPO法人 グラウンドワーク三島 (静岡県)

活動概要

高度経済成長に伴う環境悪化により1960年代にドブ川と化した「源兵衛川」を再生するため、市民・NPO・企業・行政とのパートナーシップによる実践的・持続的なグラウンドワーク活動を実施。「水の都・三島」の原風景である水辺自然環境の復活に大きく寄与した。グラウンドワーク三島は、市民・NPO・企業・行政の利害調整を行い、それぞれの専門性を発揮できる地域協働の仕組みを構築し、地域課題を市民の発意により解決する「市民公協事業」を実践してきた。三島の生物多様性の再生を目的とした市民主導の活動は23年間にわたり発展的に継続されており、その活動の効果は「地域再生・観光振興」にまでも拡大している。

活動年数 23年 (1992年／平成4年～現在)

活動実施場所 静岡県

More about the Project

JR三島駅南口から徒歩10分の市街地に、年間30回以上の継続的な環境改善活動の実践を通して、豊かな生態系をもつ水辺自然空間が再生・復活した。姿を消してしまった絶滅危惧種の群落が復活したほか、20年来の放流活動により自生したゲンジボタルが、ピーク時には250匹以上の乱舞が見られるまでになった。こうして形成・増幅された自然環境が、「水と緑のコリドー」として有機的に連結することで生物多様性の強化につながり、生きものたちの生息域が向上している。さらに、環境が再生されたことで周辺市街地にも魅力的なお店が創出され、水辺への来訪者が増加。大通り商店街の空き店舗はゼロとなった。



ホームページ <http://www.gwmishima.jp/>

プロジェクト名 大谷ハチドリ計画 (Ohya Hummingbird Project)

団体名 気仙沼市立大谷中学校 (宮城県)

活動概要

寒流と暖流がめぐる三陸の恵まれた自然を有しながら、農林水産業は衰退し従事者も減少している。その衰退により地域の暮らしを支えていた自然は手入れもされなくなり、さらに松枯れや磯焼けなどの異変が追い打ちをかけるように発生した。この状況から地域の自然と暮らしを守るため、大谷中学校の生徒達は一人一人が「私にできること」を実践し始めた。松枯れが林業、磯焼けが漁業に関わることから、農業としてのふゆみずたんぼを加え、大谷の自然と農林水産業すべてを学ぶ体制を確立。このプロジェクトは地域機関や研究機関の協力を得ながら、幼小中が連携する「大谷ハチドリ計画」となり、地域の自然を守ることから地域を元気にする活動へと大きな広がりを見せている。

活動年数 11年 (2004年/平成16年~現在)

活動実施場所 宮城県

More about the Project

大谷ハチドリ計画の中核である「ふゆみずたんぼ」は東日本大震災の津波により被災したが、多くのボランティアの支援により復興する。だが2013年、復興事業として圃場整備が計画され、「ふゆみずたんぼ」も対象となる。たんぼでの活動を断念せざるを得ない状況となったが、地権者からの申し出により「ふゆみずたんぼ」の継続が整備計画に取り入れられた。これを機に「いきものたんぼプロジェクト」を新たに設立し「大谷ハチドリ計画」と連携しながら地域全体での活動を開始。圃場整備により失われる恐れがあるたんぼの生態系について調査結果をまとめ『生態系調査報告書』として出版した。本年3月、当プロジェクトは、国連生物多様性の10年日本委員会により連携事業にも認定されている。



ホームページ http://www.kesenuma.ed.jp/ooya-cyuu/html/htdocs/index.php?page_id=0
<http://ikimonotambo.com/>

テーマ 生物多様性に学ぶものづくり インセクトテクノロジー

演者 長島 孝行 (ながしま たかゆき) 東京農業大学農学部 教授

略歴

ニューシルクロードプロジェクト代表。日本野蚕学会評議委員、千年持続学会理事、オーガニックコスメ協会理事、日本マイクロナノパブル学会理事、富岡シルクブランド協議会顧問、攻めの農林水産業の実現に向けた革新的技術緊急展開事業に関する専門PO(2014年~)

日本学術フォーラム委員(科学技術庁2000年)、千年持続社会に向けた科学技術のあり方に関する調査委員(文部科学省2001年)、日経サイエンス「未来を創る科学者達」に採択(2003年度、2010年度)

また、「愛・地球博」中部千年共生村、生物力監修、洞爺湖サミット科学技術プレゼンテーション(外務省)、Silk Diversity(国連大学)、COP10(名古屋) 他多数のイベントを主催。



MEMO



国内賞「生物多様性日本アワード」

生物多様性日本アワードは、2010年に日本で開催された「生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)」を契機に2009年に創設され、以来、2年に一度、奇数年に実施しています。

- 主催/公益財団法人イオン環境財団
- 後援/環境省、国連生物多様性の10年日本委員会、株式会社共同通信社、朝日新聞社、毎日新聞社、読売新聞社
- 応募資格/日本国内に在住する団体・組織・企業・個人
- 対象/生物多様性の保全、持続可能な利用、普及・啓発に関する取り組み
- 顕彰内容/グランプリ1件:表彰状、副賞200万円
優秀賞4件:表彰状、副賞100万円

第1回 生物多様性日本アワード

グランプリ

企業との協働による
谷津田の保全

NPO法人アサザ基金
白菊酒造株式会社
株式会社 田中酒造店



優秀賞

- ◆知床の生物多様性に関する取り組み:財団法人知床財団
- ◆「農」に着目した地域における生物多様性の保全のための活動:NPO法人農と自然の研究所
- ◆エコロジカルネットワークの研究と実践:鹿島建設株式会社
- ◆「コウノトリ育む農法」とコウノトリ共生米:コウノトリ育むお米生産部会/JAたじま/NPO法人コウノトリ湿地ネット/豊岡市/兵庫県豊岡農業改良普及センター
- ◆生物多様性保全を含む10の調達指針:積水ハウス株式会社
- ◆「生物多様性について考えてみませんか」定期的な取り扱い:中日信用金庫
- ◆「ボルネオはあなたが守る!!」キャンペーン:サラヤ株式会社

2009

2010

第1回 生物多様性みどり賞 受賞者



ジャン・ルミール氏
(カナダ)
生物学者、探検家、映画製作者



グレッチェン・C・デイリー博士
(アメリカ合衆国)
スタンフォード大学 教授



エミル・サリム博士 (インドネシア)
インドネシア大統領諮問会議 議長
元インドネシア人口・環境大臣

国際生物多様性年 特別賞 受賞者



アンゲラ・メルケル氏
(ドイツ)
ドイツ連邦共和国首相

第2回 生物多様性日本アワード

グランプリ

湿地環境の指標種としてのガン類の保護およびその
生息環境の保全・復元と人間の共生をめざす活動

日本雁を保護する会



優秀賞

- ◆茅場の保全から茅葺屋根まで -ヨシ原と共に生きる-:有限会社 熊谷産業
- ◆クマ保護管理事業:NPO法人ピッキオ
- ◆山梨県小菅村における多摩川源流大学を中心とした源流域の自然保全活動と教育活動:NPO法人多摩源流こすげ
- ◆野田自然共生ファーム:株式会社 野田自然共生ファーム

2011

2012

第2回 生物多様性みどり賞 受賞者



フアン・カルロス・カスティージャ博士
(チリ)
チリ カトリカ大学 生態学部 教授



ロドリゴ・ガメス=ロボ博士
(コスタリカ)
コスタリカ生物多様性研究所(インビオ) 代表



ボ・クイ博士 (ベトナム)
ベトナム国家大学 ハノイ校
自然資源管理・環境研究センター 名誉総長

第3回 生物多様性日本アワード

グランプリ

津波に被災した田んぼの
生態系復元力による復興

特定非営利活動法人
田んぼ



優秀賞

- ◆太平洋沿岸カツオ標識放流共同調査と一連の協働・普及啓発活動:味の素株式会社
- ◆「竹紙(たけがみ)」の取り組み:中越パルプ工業株式会社
- ◆綾の照葉樹林プロジェクト:てるはの森の会
- ◆ネイチャー・テクノロジー創出のシステム構築:ネイチャー・テクノロジー研究会/東北大学大学院 環境科学研究科

2013

2014

第3回 生物多様性みどり賞 受賞者



カマル・パワ博士(インド)
アショーカ生態学環境研究トラス(ATREE,インド) 代表
マサチューセッツ大学 ポストン校 特別教授



アルフレッド・オテング=イエボア博士
(ガーナ)
ガーナ生物多様性委員会 議長



ビビアナ・ヴィラ博士(アルゼンチン)
ビクニャ/ラクダと環境 学際研究プロジェクト(MICAM) 代表
アルゼンチン学術研究会議(CONICET) 主席研究員

国際賞「The MIDORI Prize for Biodiversity(生物多様性みどり賞)」

「国際生物多様性年」であった2010年、イオン環境財団が20周年を迎えたことを記念して「The MIDORI Prize for Biodiversity(生物多様性みどり賞)」を創設。以来、2年に一度、偶数年に実施しています。

- 主催/公益財団法人イオン環境財団
- 共催/生物多様性条約事務局
- 後援/環境省、株式会社共同通信社、朝日新聞社、毎日新聞社、読売新聞社
- 応募資格/Webサイトを通じた公募推薦もしくは有識者による推薦であること
- 対象/実践、科学、政策、啓発分野において生物多様性の保全と持続可能な利用に貢献するすべての人々
- 顕彰内容/受賞者3名 表彰状、記念品、副賞10万USD

